

教育課程の違いによる看護・介護の視点の特性に関する研究

—高齢者事例のアセスメント内容の分析を通して—

Differences in Observations Occurring Between Students of Different Majors
—An analysis of assessments in one case involving an elderly client—

原田 秀子* 堤 雅恵* 中谷 信江*
中尾 久子** 高野 静香*

Hideko HARADA*, Masae TUTSUMI*, Nobue NAKATANI*
Hisako NAKAO**, Sizuka TAKANO*

キーワード：看護 介護 連携・協働 基礎教育
教育課程 事例分析

はじめに

近年、高齢者介護のケアの現場において看護職と介護職との協働の機会が増えている。吉岡等は、両職種は法的にも教育背景も違う専門職種であるし、今後も相互に連携しあっていく上からも、その役割を明確にしておくことが必要である¹⁾と述べている。しかし、両職種間の相違点や相互の理解にたったケアサービスが現場で十分なされていると言い難い現状もある。そこで、看護職と介護職が連携するためには、各々の職種がどのような視点で介入しているのかを理解する必要があると考えた。各々の視点の特性を理解し、連携していく上で、基礎教育は知識・技術・態度にわたって専門職としての基盤を形成する大きな役割を持っているといえる。

本研究の目的は、看護師・介護福祉士の養成課程に在学中の学生が、同一の高齢者事例について、注目した情報とそれに基づいて設定したケア目標の内容から、看護・介護の視点の特性を明らかにすることである。

2. 研究方法

1) 研究期間

平成10年4月～平成16年7月

(うち調査期間は平成10年～平成12年)

調査を行なった平成10年～平成12年の間は、看護学部のカリキュラムおよび介護福祉士養成課程のカリキュラム共に、入学年次による教育内容や進度の違いはなかった。

2) 研究対象

看護過程についての講義を終了した本学看護学部3年生70名および介護過程についての講義を終了したU短期大学介護福祉士養成課程2年生73名。

対象者は看護師の資格を持つ同一の教員から看護過程、介護過程についての講義を受けている。看護学生の学習進度としては、慢性の経過をたどる成人・老人患者を対象とした病院実習と高齢の患者を対象とした病院・高齢者施設での実習を終了している。介護学生の学習進度としては、軽介護の高齢者を対象とした老人福祉施設での介護実習を終了している。

* 山口県立大学看護学部

** 九州大学医学部保健学科 (前山口県立大学看護学部)

3) 研究方法

事例を用いて、看護師養成課程のうち2年課程と3年課程の看護学生の情報分析能力の比較を行った高橋²⁾の手法を参考にして、本研究でも同一の事例を用いて、看護学生と介護学生の視点の違いを分析することにした。手順は以下の通りである。

- (1)同一の高齢者事例について、表1に示したワークシートを使用して、90分以内にワークを行う。

(2)事例の看護目標・介護目標（以下ケア目標とする）を設定する際に特に注目した情報（複数抽出可）について、各教育課程間で比較検討する。

(3)事例で最も優先すべきケア目標として設定した目標（1つのみ）について、類似する内容を群にまとめて分類し、各教育課程間で比較検討する。

- 4) 倫理的配慮として、事前に研究の趣旨を説

表1 高齢者事例のワークシート

次の事例について以下のことを記述してください。

事例：A氏

大正13年※12月18日生まれ、79歳、女性。

Y県の農家の三女として生まれ、周囲の人からはおとなしく優しい子、といつも言われていた。子供の頃から家業であった農業をよく手伝い、成人してからも土いじりをしたり花を見たりするのが好きであった。

昭和28年※大工をしていた夫と結婚したが、夫の体が弱かったため、二女を出産した後、内職やパートで家計を援助した。夫は胃癌により45歳で死亡、以後食堂で働き、二人の子供を育てた。子供が中学卒業後自立して家を出てからは一人暮らしを続けていたが、昭和50年以降、高血圧・糖尿病などで入退院を繰り返すようになり、仕事ができず、生活保護を受けることになった。

平成元年脳出血で倒れ右半身不全麻痺が起こった。入院3ヶ月余りで退院し自宅に戻ったが、歩行が不安定であり、また知的理解・言語機能の衰えが著明となって一日中寝たり起きたりの生活を送るようになり、自宅での自立した生活が困難であると判断されたため、特別養護老人ホームに入所した。入所後9ヶ月、夜間突然に高血圧・昏睡状態となり救急病院に入院、糖尿病による重度の腎障害と診断された。インスリン療法、食事療法が行われ、2ヶ月後に退院した。

現在、ホームでもインスリン療法と食事療法が続けられているが、定期検査や注射には応じるものの、食事療法については不満が見られ、食品の内容やおやつなどが他の入所者と異なる時は激怒し拒食をすることがしばしばある。時に同室者に対して食べ物を要求したり、断るとものを投げつけようとするなどの行動があるため、同室者は職員にわからないように時々食べ物を提供している。（※生年月日および結婚年は調査を実施した年度に応じて整合性をもたせ調整した）

1. 看護計画の立案に必要な情報源となっている文中の箇所全てに下線を引いてください。
2. A氏に対して最も優先すべき看護目標を一つ立ててください。
3. 2で看護目標を立案する時、文中の特に注目した箇所（情報）全てに二重の下線を引いてください。
4. 2の看護目標に対する計画を立ててください〔数はいくつでもよいです〕。

明して承諾を得た。

3. 結果

有効回答数及び有効回答率は、看護師養成課程43名(61%)、介護福祉士養成課程57名(87%)であった。

高齢者事例の情報(表1)は、まとまりのある文節毎に区切り、表2に示すように33の情報に分類した。ケア目標は、類似する内容をまとめて14

5) 分析方法

統計処理は、統計ソフトSPSS Ver10.0Jを用い、2群間の比較には χ^2 検定を用い、有意水準を5%とした。

表2 高齢者事例の情報の分類：33項目に分類

過去の生活背景や病歴

1. 大正13年12月18日生まれ、79歳
2. 女性
3. 県の農家の三女として生まれた
4. 周囲の人からはおとなしく優しい子、といつも言われていた
5. 子供の頃から家業であった農業をよく手伝っていた
6. 成人してからも土いじりをしたり花を見たりするのが好きであった
7. 昭和28年大工をしていた夫と結婚した
8. 夫の体が弱かったため、内職やパートで家計を援助した
9. 二女を出産した
10. 夫は胃癌により45歳で死亡した
11. 夫の死後、食堂で働き
12. 二人の子供を育てた
13. 子供が中学卒業後自立して家を出てからは一人暮らしを続けていた
14. 昭和50年以降、高血圧・糖尿病などで入退院を繰り返すようになった
15. 入退院を繰り返すようになってから、仕事ができず、生活保護を受けていた
16. 平成元年脳出血で倒れ右半身不全麻痺が起こった
17. 入院3ヶ月余りで退院し自宅に戻った

現在の症状の経過や生活状況

18. 退院後、歩行が不安定であった
19. 知的理解・言語機能の衰えが著明となった
20. 一日中寝たり起きたりの生活を送るようになった
21. 自宅での自立した生活が困難であると判断されたため、
22. 特別養護老人ホームに入所した
23. 入所後9ヶ月、夜間突然に高血圧・昏睡状態となり救急病院に入院
24. 糖尿病による重度の腎障害と診断された
25. インスリン療法、食事療法が行われた
26. 2ヶ月後に退院した
27. 現在、ホームでもインスリン療法と食事療法が続けられている
28. 定期検査や注射には応じる
29. 食事療法については不満が見られる
30. 食品の内容やおやつなどが他の入所者と異なる時は激怒し拒食をすることがしばしばある
31. 時に同室者に対して食べ物を要求する
32. 断るとものを投げつけようとするなどの行動がある
33. 同室者は職員にわからないように時々食べ物を提供している

のカテゴリーに分類した。看護学生と介護学生がケア目標を設定する際に特に注目した情報（複数抽出可）の抽出率を図1、図2に示した。

特に注目した情報の抽出率を看護学生と介護学生で比較すると、発達段階を示す「79歳」（ $p=0.04$ ）、現病歴を示す「高血圧・糖尿病などで入退院を繰り返すようになった」（ $p=0.014$ ）、痴呆の程度を示す「知的理解・言語機能の衰えが著明になった」（ $p=0.002$ ）合併症を示す「糖尿病による重度の腎障害と診断された」（ $p=0.04$ ）、

治療内容を示す「インスリン療法、食事療法が行われた」（ $p=0.001$ ）、治療上の指示の遵守困難を示す「同室者は職員にわからないように時々食物を提供している」（ $p=0.015$ ）については看護学生の抽出率が有意に高かった。

一方、趣味を示す「成人してから土いじりをしたり花を見たりするのが好きであった」（ $p=0.00019$ ）、生活の自立度を示す「退院後、歩行が不安定であった」（ $p=0.04$ ）、「1日中寝たり起きたりの生活を送るようになった」（ $p=0.011$ ）

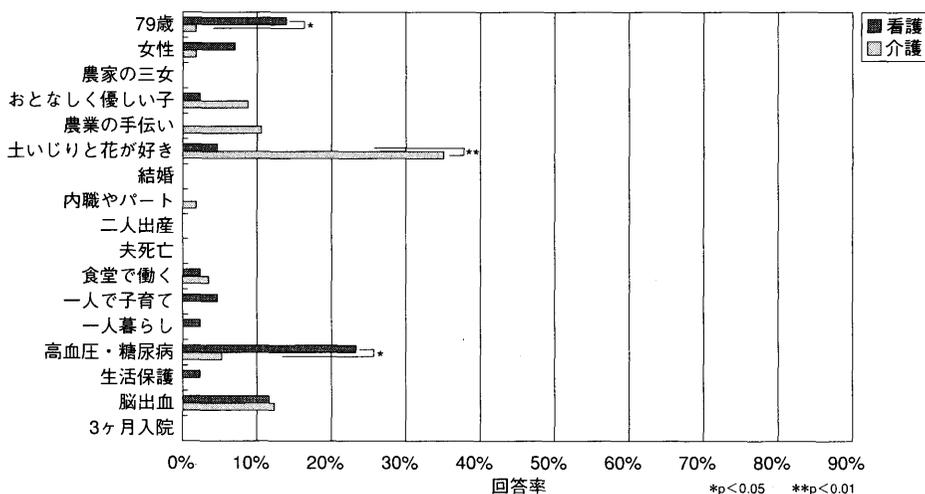


図1 過去の生活背景や病歴で特に注目した情報（複数回答）

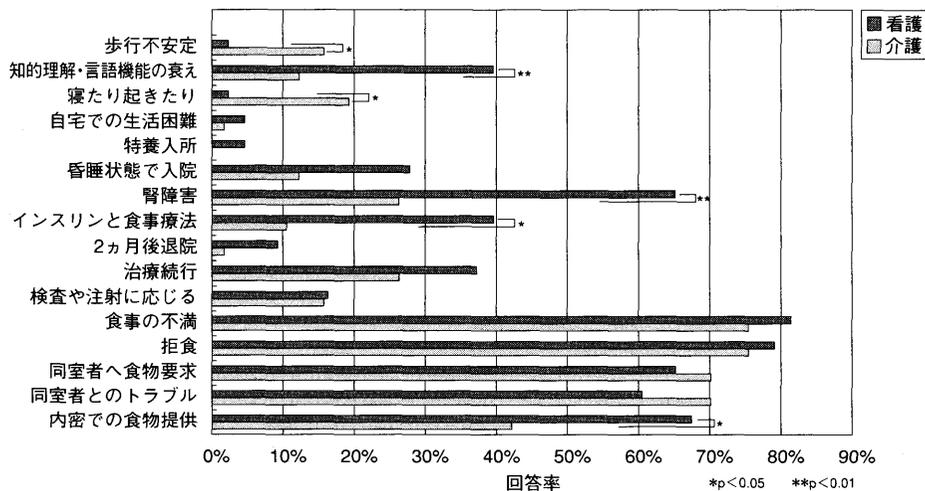


図2 現在の病状の経過や生活状況で特に注目した情報（複数回答）

については介護学生の抽出率が有意に高かった。

また、両課程とも抽出率が高かった情報は、「食事療法については不満が見られる」「食品の内容やおやつなどが他の入所者と異なる時は激怒し拒食をすることがしばしばある」、「時に同室者に対して食べ物を要求する」、「断るとものを投げつけようとするなどの行動がある」、「同室者は職員にわからないように時々食べ物を提供している。」であり、いずれも食事療法を行う上で問題となる情報であった。

一方、これまでの生活背景や過去の病歴を示す1～17の情報については、現在の病状の経過や生活状況を示す18以降の情報に比べ、両課程とも抽出率が低い傾向がみられた。

2) 最も優先すべきケア目標について

ケア目標は、類似する内容をまとめると14のカテゴリーに分類できた。最も優先すべきケア目標(1つのみ)の回答率を図3に示した。14のケア目標のうち食事に関する目標が多く、「食事療法が行える」、「食事療法の不満が軽減する」、「拒食がなくなる」、「食事療法の必要性が理解できる」、「楽しくおいしく食事ができる」の5つが挙げられた。

看護学生、介護学生共に最も回答率が高かった目標は「食事療法の不満が軽減する」であった。

次いで、看護学生は「食事療法が行える」を挙げ、介護学生は「余暇生活の充実」を挙げていた。看護学生のみ目標として挙げていたのは、「血糖コントロールができる」、「インスリン療法が行える」であった。一方介護学生のみ目標として挙げていたのは、「余暇生活の充実」、「ストレスの解消」、「人的交流が持てる」、「リハビリテーション」であった。

14のケア目標のうち、各課程間で回答率に有意差を認めたものはなかった。

4. 考 察

1) 看護学生の視点の特性について

看護学生が特に注目した情報については、食事療法を行う上で問題となる情報の抽出率が高かった。また、看護学生は、病状の経過や障害の程度、治療内容、治療上の指示の遵守困難を示す情報の抽出率が介護学生に比べ有為に高かった。

また、最も優先すべきケア目標については、看護学生が最も多く挙げていたのが「食事療法の不満が軽減する」であり、次いで「食事療法が行える」であり、このことから、食事療法を受け入れ実践することを優先度の高いケア目標として捉えていることがわかる。

以上のことから看護学生は、看護は主に医療面

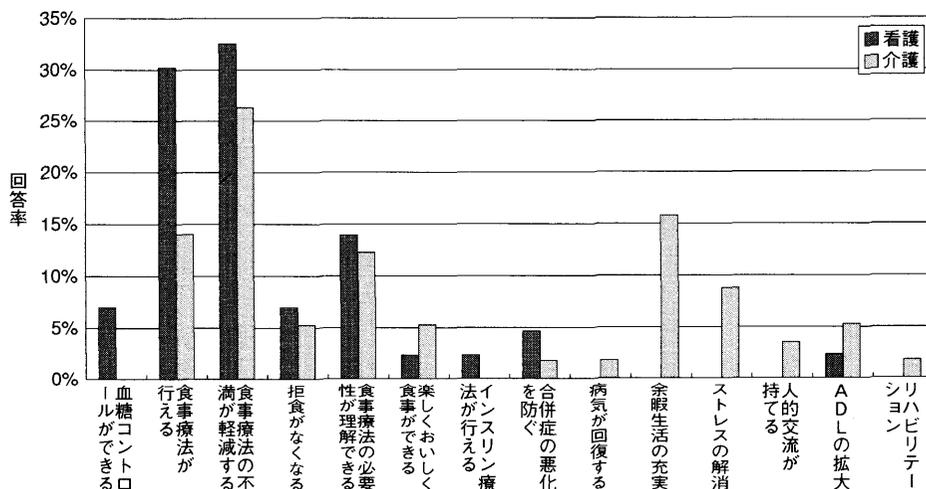


図3 事例で最も優先すべきケア目標 (1つのみ回答)

を重視したアプローチが必要であるという認識を持っていることが示唆された。その背景には、看護教育が医学的な基礎知識をふまえた看護学の知識・技術を重視している事があげられよう。看護教育では看護学の基礎として人体の形態・機能や病態を学び、自然科学としての根拠を基礎においた上で、より良い医療や看護ケアへの思考と実践が繰り返し教育されている。このことから臨床の医療チームの中で生活者に最も近い存在である看護師に、日常生活において治療上の指示を守るための説明をし、援助することが期待されていると考える。

事例のA氏は、糖尿病と高血圧を以前から指摘されており、その後脳出血を発症し、身体的にも精神的にも機能の低下を生じており、さらに腎障害も合併し身体機能は更に低下している状況にある。このような状況にあるA氏は、現在食事療法に不満を示し、食事療法を遵守しない行動が目立っている。A氏の情報の中でも、看護学生は現在顕著に現れている食事療法を行う上での問題行動に注目しており、それが目標にも反映されていると考える。糖尿病の治療として食事療法は特に重要であり、合併症を悪化させないためにも現在行われているインスリン療法と共に食事療法を遵守することがA氏にとっては最優先されるという判断が働いたとためと考える。

しかし身体的にも精神的にも機能の低下が進んだA氏にとって、食事療法を遵守するための行動をとることは困難といえる。A氏は脳出血の後遺症である麻痺のため生活の自由も奪われ、理解力や言語機能の衰えから自分の意思を伝えることが困難になっていることが推察され、それらのことからかなりストレスフルな状況におかれている。その上食事療法という制限が加わることでストレスは更に増大していると考えられる。現在現れている問題行動は、ストレス解消のためにA氏にできる唯一の手段であることが推察できる。更に腎障害により起こってくる尿毒症症状として出現しやすい精神症状も、食事療法を行う上での問題行動に影響していることが考えられる。

そのためA氏には身体症状のコントロールと、ストレスの解消を図るといった両方の視点からの介入が優先され、それが反映されたものがケア目標として挙がってくると考える。以上のような、A氏の事例から考えられる優先目標と看護学生が挙げた優先目標との間のずれは、食事療法を行う上での問題行動の捉え方の違いによるものと考えられる。A氏の行動は、確かに食事療法の遵守困難を示す行動であるが、そのような行動がなぜ見られているのかをアセスメントすることで、より問題状況とケア目標が明確となると考える。

看護学生は、治療の遵守という医療面からのアプローチの重要性を認識していることが示唆された反面、注目情報が現在の問題行動に偏りがちで、全体像をうまく掴みきれていないことも示唆された。紙上事例であり情報量にも限界があり、ワークの時間にも制限がある等の限界はあるが、全体像を的確に掴むためのアセスメントについては課題が残る。

2) 介護学生の視点の特性について

特に注目した情報については、看護学生同様食事療法を行う上で問題となる情報の抽出率が高かった。つまり、最も多く注目した情報には介護学生と看護学生の間に共通性があることが明らかになった。しかし、生活の自立度や趣味を示す情報の抽出率は看護学生と比べて有意に高かった。

また、最も優先すべきケア目標については、介護学生が最も多く挙げていたのが「食事療法の不満が軽減する」であり、次いで「余暇生活の充実」であり、このことから治療に伴うストレスの軽減及び生活の質の向上を図ることを優先度の高いケア目標として捉えていることがわかる。

以上のことから介護学生は、介護は主に生活の豊かさを重視したアプローチが必要であるという認識を持っていることが示唆された。

介護職は、福祉施設において入所者の生活を支える職種として生れてきた。福祉の現場では、看護職が補いきれなかった看護業務を自然と介護職が担うようになっていった。ここでいう看護業務

とは、診療の補助業務ではなく、主として日常生活の援助を指す。介護福祉士という介護の専門職が誕生した際に「業務として入浴、排泄、食事その他の介護を行うこと」と法律で定められて以来、自立した生活を目指して対象者を生活の面から支え、助けていくことが介護職の役割として認識されるようになってきている。このような経緯から考えて、生活の豊かさを重要視するという認識を持っていることは当然のことといえる。工藤は、現実的には看護職が時間をかけにくい患者の生活の豊かさや楽しみの部分に、介護福祉士が優先的にア

プローチすることで、患者にとって快適な療養生活を提供できるのではないかと述べている。このことから現場では、介護職は自然と介護のもつ視点の特性を生かした役割を果たしていると思われる。また、介護福祉士養成教育カリキュラム(表3)をみても、社会福祉に関する科目・レクリエーション活動に関する科目・家政学等、対象者の生活を制度の側面から、また個別性にに応じてどう支えるかを重視した教育内容になっている。そのことから対象者の生活の豊かさを重視する視点が養われてくると考える。

表3 看護・介護教育課程の比較

看護師養成の授業科目			介護福祉士養成の授業科目		
科	目	単位・時間数	科	目	単位・時間数
基礎・ 教養	科学的思考の基礎	計13単位 360時間	一般教養科目 人文科学系 社会科学系 自然科学系 外国語 保健体育の内から4科目	120時間	
	人間と人間理解の基礎				
専門 基礎	人体の構造と機能	15単位	専門科目 社会福祉概論 老人福祉論 障害者福祉論 リハビリテーション論 社会福祉援助技術 レクリエーション指導法 老人障害者の心理 家政学概論 栄養・調理 家政学実習 医学一般 精神衛生 介護概論 介護技術 障害形態別介護技術	60 30 30 30 60 60 60 30 30 90 60 30 60 120 120	
	疾病の成り立ちと回復の促進				
	社会保障制度と生活者の健康				6単位
専門	基礎看護学	10単位	実習 介護実習 実習指導	450 60	
	在宅看護論	4単位			
専門	成人看護学	6単位	計23単位 990時間		
	老年看護学	4単位			
	小児看護学	4単位			
	母性看護学	4単位			
	精神看護学	4単位			
	臨地実習	23単位			
		1035時間			
合計		2895時間	合計	1500時間	

また介護学生と看護学生はいずれも、食事療法を行う上で問題となる情報を多く抽出していたが、介護学生は食事制限から来るストレスの解消の方に注目して目標を挙げており、食事療法を治療の一環として重要視した目標を挙げている看護学生との間に違いが見られた。共通した情報に注目していても、その情報になぜ注目したかの判断の過程において介護学生と看護学生の視点の特性が現れていることがわかった。この視点の違いは、前述した教育カリキュラムの違いが大きく影響していると考えられる。

3) 看護・介護が連携していく上での基礎教育における課題

看護師養成のための教育カリキュラム(表3)では、看護学を学ぶための専門基礎科目として、保健・医療・福祉に関する科目を基盤としており、看護職として幅広い分野での活躍を期待していることがわかる。その中でも看護職として医療に携わる上で必要な医学的な知識の修得を目指した科目に重点が置かれている。それに対して、介護福祉士養成教育カリキュラムは、対象者の生活を社会制度の側面から、また個別性に依りてどう支えるかを重視した教育内容になっている。一方で医学に関する科目については、看護師養成の教育カリキュラムに比べかなり少ないことがわかる。

A氏の事例展開から明らかになった双方の視点として、看護は医療面を重視したアプローチ、介護は生活の豊かさを重視したアプローチが必要であるという認識を持っていることが示唆された。介護の専門職としての介護福祉士は、主に福祉の現場において重要な役割を担い、看護職は、主に医療の現場において重要な役割を担ってきたというこれまでの経緯も教育カリキュラムに反映され、前述した双方の視点の特性となって現われてきたと考える。

横尾は、看護は対象者の療養生活を医療の側面から支え、介護は高齢や障害のために維持できなくなった生活習慣を生活の側面から支える行為であると述べている⁴⁾。そして双方共に目指すのは

対象者の自立生活であり、そのためには双方の連携が必要となる⁴⁾と述べている。

看護職は「身体を見つめる視点」が介護職よりも明確でなければならない⁵⁾と金井が述べているように、健康状態をアセスメントしながら生活の援助の方法を考え実践できることが強みといえる。介護職は生活援助の専門職として、個々の生活に対応した生活援助技術の教育に重点をおいている。介護職は、身体状況や予後に直結する治療的な関わりに責任を持つ看護職と異なり、生活の質の豊かさや安楽に着目したケアを行えるのが強みといえる。

そのため、看護職は医療の視点を強みとして生かしながら、生活の援助を介護職と共に組み立てていくことにより、よりよい援助を提供できるようになると考える。看護職は、医師の指示のもとで診療の補助行為を行う、つまり医療処置行為が許されているという点で介護職との違いはあるが、対象者の自立を目指した日常生活の援助を行うという点においては共通している。そして、看護も介護も生活援助の専門職として、施設内だけでなく在宅生活まで幅広くサポートしていくことが期待されている。そのこともふまえて看護と介護とがどう連携をとっていくか、そしてそのためには基礎教育においてお互いの職種の理解をどう深めていくかが課題となる。

そのための基礎教育における工夫として、施設や在宅の現場において両職種が共同で開催するカンファレンスに、実習の一環として参加することもお互いの職種の理解につながると考える。また、同一事例を用いた演習を介護学生・看護学生が共同で行い、両職種の視点を生かしたケアプランを考える機会を持つことも有効と考える。このように、基礎教育の段階から実習等を通してお互いの視点を生かしながら協力してケアを提供していくなど、双方が協働する機会をつくることも連携を図る上で必要となると考える。

5. 結論

今回の研究を通して、以下のような結果を得た。

- 1) 特に注目した情報では、看護学生は疾患や治療に関する情報、介護学生は生活の自立度や趣味に関する情報の抽出率が高かった。
- 2) ケア目標については、看護学生は食事療法を受け入れ実践することを、介護学生は食事療法に伴うストレスの軽減及び生活の質の向上を図ることを優先度の高い目標として挙げていた。
- 3) 事例の分析を通じた看護・介護の視点の特性として、看護学生は、看護は主に医療面を重視したアプローチ、介護学生は、介護は主に生活の豊かさを重視したアプローチが必要であるという認識を持っていることがわかった。

以上のような看護および介護学生各々の視点の違いは、教育課程の違いが影響していることが示唆された。

文 献

- 1) 吉岡洋治他：在宅ケアにおける看護と介護の役割についての検討、自治医大看護短大紀要、103-106、1999
- 2) 高橋順子：2年課程各論実習修了期における情報分析能力の実態、看護教育33(4)、1992
- 3) 工藤禎子：看護職と介護福祉士の連携のあり方、病院58(4)、1999
- 4) 横尾英子：在宅介護実践講座、中央法規出版、1999
- 5) 金井一薫：看護と介護の共通点と相違、看護1996年5月特別臨時増刊号、20-28
- 6) 高垣節子：介護実習の現状と課題、月刊総合ケア13(6)、2003
- 7) 森口靖子他：看護学生の看護と介護の違いの認識変化とその内容—在宅看護学教育の観点から—、香川県立医療短期大学紀要、第4巻、159-164、2002
- 8) 工藤禎子：介護と看護の共働を視野に入れた教育を、看護1996年5月特別臨時増刊号、46-52
- 9) 丸山美知子：看護と介護の違い 法的解釈を中心に、看護学雑誌57(11)、1993

SUMMARY

Differences in Observations Occurring Between Students of Different Majors

—An analysis of assessments in one case involving an elderly client—

The purpose of this study is to define the characteristics of perspectives regarding care goals from both nursing and care worker viewpoints when looking at the same elderly patient. The data presented is based on information obtained from undergraduate students majoring in nursing and students majoring in care working.

The subjects of the study were 70 junior year nursing students at Yamaguchi Prefectural University and 73 sophomore students majoring in care work at U junior college. The differences between each group of students' observations and their establishment of care goals were examined and compared. In comparison, the most common point in observations between the two groups was in regard to practice regarding dietic therapy. However, observations regarding therapeutic treatment were significantly higher in the nursing students. Nursing students also tended to make more observations on the course of the medical condition itself as well as the level of injury. Their concern with how the therapeutic treatment be conducted and the difficulties of the patient in complying with the instructions regarding treatment was also more apparent. On the other hand, students in the care worker course made statistically more observations regarding the level of financial independence of the patient as well as the patient's hobbies. Furthermore, through comparison of both groups, the highest priorities in regard to the care goals of nursing students was patient ac-

ceptance and conducting dietic therapy. Whereas the priorities of the students in the care worker course were the reduction of the patient' s stress as well as the enhancement of his or her living standards. The differences between the observations of both groups of students suggest that observations differ from course to course.

In order for students of both courses to be able to work with each other, it is important to provide opportunities for each group to cooperate with the other when caring for patients. A general education course providing this type of interaction is recommended.